



平成19年10月
横濱歴史研究会創立25周年記念

なに丁重に謝罪される様な方にお会いしたこともなく、本当に人格者であったことを感じた次第です。

一緒に横浜歴史研究会にいられたことを誇りに思っています。

あちらに行かれましたら、亡くなられたご長男と久しぶりにお話されていることでしょう。

どうか、愛されたご家族の幸せをお祈りし、心血を注いでいた我が会をお見守り下さい。

心より安らかなる

ご冥福をお祈りいたします。

平成三十年一月十日
合掌

会員研究

美濃の有力武士団土岐一族の興亡録

竹村 紘一

土岐氏とは

鎌倉時代から江戸時代にかけて美濃を本貫とした武門の大族で本姓は源氏。清和天皇を祖とする清和源氏の一流である摂津源氏の流れを汲む美濃源氏の嫡流として美濃国を中心に栄えた。室町時代から戦国時代にかけて侍所として五職家の一角を占めるとともに美濃国守護を務め、最盛期には美濃、尾張、伊勢の三ヶ国の守護大名となった。戦国時代に斎藤氏・織田氏・北畠氏などの対立する諸大名との勢力争いに敗れて没落し、戦国大名としては生き残れなかったが、一族に優秀な人物が多く、戦国武将として各地の大名に仕えて頭角を現した。明智光秀・浅野長政・遠山友政・仙石秀久・土岐定政（菅沼藤蔵）等でも多い。江戸時代末期まで大名として存続したのは浅野、遠山、土岐定政家の三家である。家紋は桔梗紋で、

土岐光衡が戦で桔梗花を兜に挟んで戦ったのを記念して、家紋としたのが始まりであるとされている。「土岐桔梗」と呼ばれている。土岐一族である明智光秀は水色の桔梗紋を使用していたことで有名である。

出自

源頼光とその子の頼国が美濃守となり、頼国の曾孫・光信の時に美濃国土岐郡土岐郷に居住して、はじめて土岐氏を名乗った。頼国の子の国房以降、史料上では美濃での活動が見られている。土岐氏の祖については系図類により国房、光国、光信、光衡の諸説あって明確ではないが、光衡を祖とする説が有力である。土岐氏の分流は120家以上になるが、中世に分家した家系を遡ると殆どが光衡へ繋がるので、光衡が土岐氏の祖と言える。

『江濃記』に「土岐殿と申すは、

頼光の後胤也。清和天皇の御末、保元の頃、伊賀守光基と申す人大功有り、美濃国守護を給わり、その子・伯耆守光長、法住寺合戦に討ち死し、その弟・光衡、また美濃に居住し、是を神戸判官と云ふ。その子・光行は、信濃守に任じ、関東へ下向して將軍に奉仕。その後、美濃守光貞、北条家の婿と成りて、子孫繁盛也」とみえる。

鎌倉末期、倒幕を企図する後醍醐天皇の側近日野資朝は、武士の中に同志を求めて関東に下り、土岐一族と接触を持ち、土岐頼兼、その従兄弟・頼員（舟木頼春とも）、同族の多治見国長らの参加を得た。しかし、頼員は、妻との別れを惜しんで、ある夜の寝覚めの語らいに、不用意にも計画を漏らしてしまった。頼員の妻の父は六波羅の奉行斎藤利行だったため、心配した妻は夫の為を思い、父に一部始終を打ち明けたのであった。

密告を受けた六波羅探題により、頼兼や国長の京の宿舎が襲われ、頼兼・国長は、まさか一族の頼員の口から計画が洩れたとも知らず、探題軍に急襲されて討死した。ここに後醍醐天皇の倒幕計画は失敗に終わった。首謀者の日野

俊朝や日野資朝が捕縛された。世に正中の変」と称される。

その後の「元弘の変」を経て後醍醐天皇の倒幕計画が成功し建武の新政が発足したが、公家や女官や僧侶への配慮が多く、武士等の期待に沿うようなものでないことが明白となった。武士の多くは天皇を離れて武門の棟梁として清和源氏の流れである足利尊氏を担ぐようになった。後醍醐天皇没後は、公家勢力の凋落は益々顕著となる。武士階級が古い伝統・権威や価値観を破壊した時期であった。

当時の状況を反映した事件のひとつに、バサラ大名として知られた美濃国守護土岐頼遠による光厳上皇への乱暴狼藉の一件がある。これは、上皇の車と出会った頼遠が、本来ならば下馬すべきところを降りようともせず、それを上皇の召次にとがめられると、頼遠はせせら笑い、家来に命じて上皇の車に矢を射かけたというものであった。事件後、さすがにこの一件を重くみた足利直義によって頼遠は斬刑に処せられた。頼遠は桔梗の旗印を翻し、尊氏・義詮に従って各地を転戦した足利方の勇将であった。「観応の擾乱」で足利義

詮が直義軍に敗れ、後光厳上皇を奉じて京都を脱出した時には、美濃に行宮を営んで一行を迎えている。頼遠は一族の結束を固めて美濃平野に睨みを利かせ、その後の土岐氏の勢力の基盤と作ったのである。頼遠は、一介の武弁ではなく、勅選和歌集の三集に十二首も採られる風流人でもあった。また、父と同じく寺社の開基に取り組み、夢窓疎石を美濃に招いて加茂郡に妙楽寺・東光寺を創建してもいるのである。

鎌倉時代

光衝は治承・寿永の乱の時代の人物で、鎌倉幕府の成立にともし源頼朝の御家人になった。江戸時代の書物に光衝が美濃守護に就任したという記述があるが、信憑性は低いとされる。鎌倉時代の美濃の守護は大内惟義、大内惟信、その後は北条氏、宇都宮氏であり、鎌倉時代に土岐氏が守護になったことはない。

承久三年(1221)の承久の乱では美濃が主戦場となり、京方(後鳥羽上皇方)に「土岐判官代」の名が見え、これを光衝の子の光行とする書物もあるが、光行はこれ以後も幕府の記録の『吾妻鏡』

に登場しており、京方の「土岐判官代」は弟の光時との説も唱えられている。

光定の時に九代執権北条貞時の娘を妻としており、土岐氏が幕府において有力な地位にあったことが分かる。嘉元三年(1305)、光定の子の定親(蜂屋氏)は連署北条時村襲撃事件(嘉元の乱)に関与して処刑されている。兄弟の頼貞に累は及ばなかったようで、頼貞の系統が土岐氏の嫡流となる。

鎌倉時代には土岐氏は庶流を美濃国内に多く土着させて、家紋に因んだ「桔梗一揆」と呼ばれる強固な団結をした武士団を形成し有力な武士団となる。

南北朝時代

正中元年(1324)に起きた後醍醐天皇の最初の討幕計画である正中の変において『太平記』では頼貞が計画に加担し、陰謀を察知した幕府軍に討たれる話になっている。しかしながら、頼貞はその後の戦乱で活躍しており、記録に混乱があるが、前述の如く、土岐氏の一族がこの計画に関与したのは確かである。

元弘元年(1331)、足利尊氏、

新田義貞らの挙兵によって鎌倉幕府が滅亡した時(元弘の乱)には頼貞は尊氏に味方し、その後の南北朝の争乱でも尊氏と共に転戦して戦功を挙げ、美濃守護に任じられた。美濃に強い地盤を持つ土岐氏は足利一門ではないが、足利氏の厚い信頼を得て足利將軍家を支える有力な武士団となっていた。

頼貞から守護職を継いだのは、頼貞の七男で勇猛を謳われたバサラ大名としても知られる頼遠である。頼遠は平安時代からの発祥の地であった土岐郡から厚見郡に新築した長森城へと本拠を移転している。頼遠は軍将としての才があり、合戦では目覚ましい働きをしていたが、驕慢な振る舞いが限度を超えて、康永元年(1342)、光厳上皇への狼藉事件を起こして直義により処刑された。頼遠の跡を受け美濃守護となったのが、甥にあたる頼康(頼貞の孫。頼遠の甥)が継ぐと合戦では尊氏・義詮父子に味方し、度々戦功を挙げた。本領美濃の他にも、尾張と伊勢の守護職を兼任する大大名となり、最盛期を迎えた。その上、評定衆にも加えられた頼康は、幕府創業以来の宿老として重きを置かれ

た。

美濃国内においては、叔父・頼遠が新築した長森城が手狭であるとして、同じ厚見郡内に川手城を築いた。以降、川手城は室町期を通し十三代守護頼芸に至るまで、土岐宗家の居城となった。

こうして美濃一国に君臨することになった土岐氏は、足利一門ではないが、足利将軍家との繋がりを強固にし、室町幕府に忠実な守護・守護大名として安定的な領国支配を展開して行く。

室町時代

嘉慶元年（1387）頼康が死去すると、養嗣子に迎えた甥の康行が惣領を継ぐ。ところが、三代將軍義満の治世では將軍の権力強化の煽りを受けて、勢力削減の對象となった守護大名が出てきた。足利氏の一門である今川氏でさえ、これまで大功のあった今川了俊（貞世）が処罰され、勢力を弱められている。後には、大領を有する山名氏や大内氏も義満の標的となったのである。

土岐氏への処断は今川氏よりも早かった。康行は惣領でありながら美濃と伊勢の二ヶ国のみを領有しか許されず、残る尾張は満貞（康

行の実弟）に分与された。有力守護大名への將軍家の介入であった。有力守護大名の権力を削減するのが義満の方針であったのである。この処置に不満な康行は挙兵に追い込まれて、幕府軍の討伐を受けて没落した（土岐康行の乱）。

美濃守護職は頼忠（頼康の弟。康行の叔父）に与えられたが、土岐氏の伊勢守護職は認められずに足利一門の仁木氏へ移った。以後、土岐氏の惣領は、頼忠の系統（土岐西池田氏）が継ぐことになる。

伊勢を収公された康行は、明德二年（1391）の山名氏の明德の乱で幕府方として参戦、功により、後に伊勢守護に復帰した。この康行の系統は土岐世保家と呼ばれる。一方、明德の乱に幕府方として参戦した満貞は、卑怯な振る舞いがあったとして尾張守護を解任され没落。尾張守護は足利の有力一門の斯波氏に継承された。これらにより、土岐氏の勢力は義満の方針により大きく削減された。

しかし、美濃の守護職を務める頼忠の子・頼益は、優れた武将であり、合戦でしばしば戦功を挙げ、「幕府七頭」の一家として評定衆に列し、侍所別当として幕閣の重

鎮となった。

嘗ての土岐康行の乱では土岐氏庶流の多くが康行に味方したため、新たに美濃守護となった頼忠の土岐西池田氏は外様の国人である富島氏と斎藤氏を守護代として重用する。その後、持益の頃に富島氏と斎藤氏の争いが美濃全土を巻き込む内乱に発展した（美濃錯乱）。最終的に勝利した斎藤氏が、守護代を単独で継承して美濃の実権を握るようになると、持益は隠居させられ、斎藤利永が擁立する庶流の成頼が守護になった。

応仁元年（1467）に応仁の乱が起きると成頼は西軍に加わった。この乱では重臣の斎藤妙椿（斎藤利永の弟）が活躍、美濃の東軍方（富島氏）を駆逐し、さらに公家の莊園や国衙領を盛んに押領して国内を制圧。尾張、伊勢、近江、飛騨まで勢力を伸ばして、妙椿は西軍の重鎮に数えられるようになる。斎藤妙椿は越前の朝倉孝景と共にこの時代に守護代が守護の力を凌いだ下剋上の事例として有名である。

戦国時代

文明十二年（1480）に妙椿が死去すると、二人の甥・斎藤利

国（妙純）と斎藤利藤兄弟が争い

（文明美濃の乱）、その後は妙純（斎藤利永の子で伯父の妙椿の養子）と守護代の家宰石丸利光が戦った（船田合戦）。この美濃の騒乱では守護の土岐氏（成頼と嫡男・政房）は国人たちの争いには名分上担ぎ出される傀儡に過ぎなくなっていた。妙純が近江出兵中に戦死すると、斎藤氏は主要人物を失い、国人たちは政房の子の頼武（政頼とも盛頼とも）と頼芸の兄弟を各々が擁立して争い、それに尾張の織田氏や近江の六角氏、越前の朝倉氏が介入したこともあり、斎藤氏は次第に衰亡して、その間に家宰の長井氏が台頭した。

やがて新参の長井新左衛門尉（松波庄九郎。西村勘九郎長利とも。斎藤氏を継ぐ。斎藤道三の父）が頭角を現すと、守護の頼武を追放して鷲山城の頼芸を守護に就ける。新左衛門尉は長井氏を乗っ取り、次いで新左衛門尉の跡を継いだその子の長井規秀（後の斎藤道三）が斎藤家の名跡を継ぎ、斎藤利政を名乗った。

傀儡になっていた頼芸は天文二十一年（1552）頃に追放され、美濃土岐氏は没落した。頼芸はそ

の後、武田信玄を頼つて甲斐国に行き、そこで没したとも、上総に落ち、さらに稲葉一鉄に迎えられて美濃で死んだともいわれている。子・頼次が秀吉を経て家康に

仕えて、徳川旗本として家名は存続した。以前の通説では斎藤道三の国取りは一代で成し遂げられたとされていたが、近年の研究で親子二代に亘るものであることが判明している。(近江佐々木氏史料)尚、頼芸の弟の治頼は分流の常陸江戸崎土岐氏を継いでおり、美濃を追われた頼芸は一時江戸崎(現在の茨城県稲敷市)に身を寄せている。この時に、頼芸が土岐氏の嫡流を譲つたとされるが、その江戸崎土岐氏もまた豊臣秀吉の小田原征伐に際し領地を失い滅亡した。さらに頼芸は上総万喜城(現在の千葉県いすみ市)の分流である土岐為頼を頼つたが、この上総の土岐氏も小田原征伐に際し領地を失い滅亡した。

江戸時代以後

一説では、頼芸は天正十年(1582)まで生きて天寿を全うし、その子・頼次と頼元は旗本として幕府に仕えた。治頼の子孫は紀州徳川家に仕え、徳川吉宗が將軍職

を継いだ時に幕臣となった。

土岐世保家、常陸土岐氏、上総土岐氏については省略させて頂いた。

主要参考文献

『斎藤道三と義龍・龍興 戦国美濃の下克上』横山住雄

戎光祥出版

『岐阜市史』

『朝日日本歴史人物事典』

『戦国史記 斎藤道三』中山義秀
(中央公論社)

『国盗り物語』司馬遼太郎

(新潮文庫)

会員研究

平清盛が目指したのは重商主義国家？

齋木敏夫

一 平忠盛(1096~1153)の影響

1108年十三歳で左衛門少尉となり1111年には検非違使を兼ねて、京の治安維持に従事した。1113年には盗賊を追捕した功で従五位下に叙される。伯耆守となり、右馬権頭も兼任した。1120年に越前守に転任し、在任中に昇殿を許された。1127年には従四位下に叙され、備前守となる。さらに左馬権頭を兼任し、1129年海賊追討使に抜擢される。白河法皇が崩御し、鳥羽上皇

が院政を開始すると正四位下に叙された。1132年上皇勅願の観音堂である得長寿院造営の落慶供養に際して千体観音を寄進した。894年に遣唐使が廃止されたが博多を通じて私的に商取引が行われていた。越前の敦賀まで宋船が来航することもあった。越前守在任中に日宋貿易の巨利に目を付け、西国方面への進出を指向するようになったと思われる。鳥羽院の領地肥前の国を管理した際に宋との取引を鴻臚館経由として多額の権益を手にした。この頃瀬戸内

海は海賊の跋扈が大きな問題となっていた。備前守を務めた経験を買われ、忠盛が追討使に任じられる。これを退治した忠盛は降伏した海賊を自らの家人に組織化した。その後、美作守に任じられ1144年には正四位上に叙され尾張守となった。和歌にも通じていた忠盛は崇徳天皇主催の歌会にも参加し、崇徳にも頼りにされる人物だった。1146年受領の最高峰である播磨守に任じられ、1148年四位の最上位者となり、翌年には内蔵頭となった。伊勢平氏で初めて昇殿を許され、北面武士・追討使として白河院政・鳥羽院政の武力的支柱の役割を果たした、諸国の受領を歴任し、日宋貿易にも従事して莫大な富を蓄え、長寿院造営の千体観音を寄進できるほどの財力を有するようになった。このような手法で得た財力と地位は清盛に大きな影響を与えた。

二 現在に残る平清盛(1118年~1181年)の業績

父忠盛が亡くなって平氏棟梁となった。保元の乱で後白河天皇の信頼を得て、平治の乱で最終的に勝利者となり、武士としては初めて太政大臣に任じられた。日宋貿